

がんばろう 南三陸町 復興第85号

南三陸マイタウン月刊情報

発行所

千葉総合印刷株式会社

本吉郡南三陸町志津川字沼田 150-84
TEL(46) 3069 FAX(46)3068

企画・編集

志津川広報センター



9月14・15日上山八幡宮で「秋季例祭」が開催された。14日の宵宮祭は17時30分からで、神事・巫女舞・夜神楽が奉納された。本殿への階段には口ウソクの列がつけられ、氏子や参拝の子どもを連れた家族や、地区の住民が足を運んでいた。待ちきれない人たちが神楽の舞台前に、出店で買ったものを持ち込み、始まるのを楽しみに座って待っている姿があった。

たがい市に来場された皆さんをコーラスの方々が合唱で楽しませてくれ、上山の八幡様の18時30分「奉納 夜神楽」の前に、出店で食べ物を買ひ、用意されたテーブルで音楽を聞きながら楽しんでいった。



2019八幡さまで「たがい市」

主催はNPO法人ウィメンズアイで、宮城県の助成金を受け運営している。今回開催は9月14日(土)の16時から19時半まで、志津川上山八幡神社駐車場を会場に行われた。

団体はおそう菜や手作り雑貨、園芸品、パンなどを売る、小さい商いをしている人たちが、皆さんの地域へ出張互市(たがいいち)として、地域のイベントや集まりに出店を行なう。今回は上山の八幡さまの祭りと同時に開催となった。

焼き鳥なっちゃん、クレープ大沼農園さん、トン汁・カレーはウィメンズアイ+ひころマルシェさん、他にも寄せ植え、縁日屋台など、お楽しみ満載の屋台が並んだ。

何も無くなった志津川地区の市街地に地域住民の集える場所として、今後も活動を期待したい。夜の町の神社に、賑わいと灯りが八幡様の境内に広がっていた。

15日の日曜日には「神輿渡御」と「稚児行列」があり、さんさん商店街の中を25名の来年少学校入学の子供たちが、行列を作って参加していた。

未来への教訓

復興! 大津波の記憶を風化させない

令和元年(2019年)

5月の出来事

～ 地元報道より ～

南三陸町

◆1日南三陸町役場に、新天皇陛下の即位へ祝意と上皇陛下の天皇退位に感謝を示す記帳所が設置された。午前9時の開始から次々と町民らが訪れた。

◆南三陸町神割崎キャンプ場で、潮騒まつりが3日から始まった。16店が出店し、海産物のほか、海の幸を生かしたメニューを販売した。多くの人出で賑わった。

◆南三陸町の「ハマーレ歌津」で、2周年記念イベントが開かれた。ホタテ焼きの販売やワカメ汁の振る舞い、ステージイベントなどがあり、好天にも恵まれ商店街が盛り上がった。

◆県は志津川高校の第1体育館の建て替えを本年度から設計を行ない、2021年秋の完成を目指すとした。完成から間もなく49年となる本体は壁面のひびなど老朽化がめだっている。

◆志津川湾さけます増殖協会による、今シーズ

入谷八幡神社の秋季例大祭



入谷中の町地区の稲穂の中を進む

9月15日の秋晴れの中を、華車を先頭に奉納八幡神社ののぼりに神輿が続き、入谷打囃子の舞手と地域住民の長い列が入谷地区を練り歩いた。

御祭が開催される前から、持ち回りの地区が準備を進めていた。今年は「水口」地区がその役割を担った。

南三陸ラーニングセンターHPより

平成11年宮城県無形文化財指定

入谷打囃子

■入谷の秋祭り

美しい田んぼの景色に囲まれた南三陸町入谷地区。毎年9月半ばに250年の歴史を持つと云われる秋祭りが行なわれます。祇園囃子の流れをくむと伝えられる優雅なお囃子と勇壮な獅子舞。色鮮やかな衣装を身につけた子どもたちと獅子が入谷地区の黄金色に染められた景色の中をゆっくり、ゆっくり練り歩くのです。

入谷打囃子は、芸人と呼ばれる獅子舞、獅子あやし、笛、小太鼓、大太鼓のほか、先陣旗や神威を示す花飾りを持つ人たちで構成されています。

一行は入谷八幡神社へと向かい、到着すると五穀豊穡と家内安全を願い、獅子舞を奉納します。その後、神輿を先頭にお旅所とよばれる「一本松」を目指して黄金色の田んぼの中を練り歩きます。そして一本松に到着すると、そこでも入谷打囃子が奉納されます。

■入谷打囃子の歴史

入谷八幡神社の例祭で行なわれる神輿渡御と打囃子による祭り行事で、打囃子は明和元年(1764年)が初奉納と云われています。

■紡がれる伝統

地元の入谷小学校では、伝統芸能の継承として打囃子保存会の指導で、笛や太鼓の練習をし、伝統芸能の継承に努めています。平成11年には宮城県の無形民俗文化財に指定されました。

子どもも大人も毎晩集まってお囃子の練習に励む姿、秋風を背景に流れる笛や太鼓の調べ、黄金色の田んぼと花飾りの鮮やかなコントラスト。村人によって毎年繰り返され、大切に受け継がれてきたもの。数百年前もきっと、同じ光景がみられたのでしょうか。

ンのサケの稚魚の放流が終了した。今シーズンは2月12日に始まり4月まで6回、八幡川と志津川湾の2ヶ所で放流を行なった。放流数は574万2千匹と昨シーズンの約7割にとどまった。

◆北海道から神戸までを自転車で巡り、チャリティーライブをしながらゴールを目指す仙台出身のバンド「ザ・燃え上がるズ」のボーカル、タバティー・タバタさん(27)が南三陸さんさん商店街を訪れ、町民らを元気づけた。父が南三陸町出身ということで、祖父母や親戚らも駆け付けタバタさんの歌に聴き入った。

◆9日、伊里前小学校の3年生32人が伊里前川で伝統のシロウオ漁を学んだ。講師は祖父の代からシロウオ漁を続けている渡邊千之さん(70)。伊里前小学校では歌津の自然に触れる学習の一環で、3年生がシロウオ漁を学んでいる。

◆志津川高校自然科学部の生徒が八幡川で行った生物調査の結果を冊子にまとめ、4500部を作成した。掲載した冊子には絶滅危惧種も含まれ、種類が特定された41種を掲載した。冊子は町内の小中学校に配ったほか、町生涯学習センターにも置いている。

◆南三陸町内の学校用地に最後まで残っていた仮設住宅の、志津川小、中学校の団地が3月末までに撤去され、ようやく震災前の状態に戻った。

神輿のお休み場としての「一本松」に立ち寄り、打囃子を奉納する。中の町にある「一本松」は、害虫によりこれまで手入れをしてきたが、倒木の危険を考慮し伐採され、今年に入り支援団体により「桜」が植樹され、新たな伝統の一步を印した。



大漁旗でライダーを応援

9月の14・15日の連休の前半、東北地区の被災地応援のツールド・東北の7回目が開催された。好天にも恵まれ、ライダーは三陸沿岸の45号線を滑走していた。

石巻市の専修大学から気仙沼市内を走る「気仙沼コース」と「南三陸コース」など5コースに4千人が参加した。気仙沼の出発式には、100Kコースに440人がスタートラインに立った。

16日には、仙台市で台湾の自転車メーカーの開催者20人が、秋保地区を走行した。仙台市の郡市長も、宮城の観光地を巡る「サイクルツーリズム」で汗を流した。

南三陸町の志津川地区の商工団地交差点では、親子らしい2人が歩道で一生懸命に大漁旗を振る姿があり、ライダーは手を上げ応援にこえていた。志津川海岸インターのT字路の信号では車の交通量が多く、「お先にどうぞ!」と右左折の車両を優先させ、交通マナーの順守で「ツールド・東北2019」を楽しんでいた。

復興期も残す所1年半となり、全国・世界から被災地支援の流れが続く事を願っている。



マナーを守り安全走行

◆11日小中学生が体験を通して、町の自然や歴史を学ぶ「南三陸少年少女自然調査隊」が発足した。小4から中1までの13人が参加。活動は月1回のペースで行なわれ、干潟の生物調査や他地域の子供たちとの交流など活動で発見した町の魅力を発信していく。

◆12日南三陸町入谷地区で、伐採された「御休場の一本松」に代わる新たなシンボルとしてサクラの木が植えられた。一本松の推定樹齢は約180年とみられるが、病気のため根元から伐採された。代わりに一本松があった脇にソメイヨシノ2本が植えられた。

◆南三陸町の防潮堤整備の全体進捗率は、3月末で約2割の17.8%にとどまっている。復興期間終了まで2年を切った。最後の工事発注が3月に完了したばかりの港もあり、ようやくこれから工事が本格化していく。

◆南三陸町の地域おこし協力隊員の活動報告会が、町役場第2庁舎で13日開かれた。報告会では取り組みを周知し今後の活動につなげるため行なわれ、町民や町職員らが報告を聞いた。

◆春の交通安全期間中の14日、志津川で「幼稚園児ほほえみ作戦」が行なわれた。子供たちがドライバーに笑顔で安全運転を呼び掛けた。あさひ幼稚園年中児、入谷ひがし幼児園年長、南三陸地区交通安全協会、安全運転管理者会などから50人が参加した。